

【2012年度卒業論文要旨】

美術館という空間とその場所性

鶴川 真琴

美術館は、「もの」を経済的価値など現実の関心や、場所といった文脈から切り離し、1つの独立した「作品」として展示する空間である。人々は日常世界から隔絶した“美術館”という非日常の空間で、作品に向き合う。このとき鑑賞者の感覚は、お金を稼いで使う、というような日常的で現実的な関心から一步離れたところにある。この状態をカントは、日常の諸関心の「括弧入れ」と表現した。すなわち美術館は人々が「括弧入れ」をするための空間である。

現代の都市空間において、美術館は閉ざされた美の殿堂や排外的な権力装置として存在していない。むしろ、その立地する場所が美術館の集客やイメージ作りに貢献し、また美術館の存在自体がその場所に新しい意味や価値を与える、という相互作用によって、美術館はその空間を場所へ開き、場所と結び付いている。場所へ結び付くことは、非日常の空間であるはずの美術館を日常の延長線上に開放し、「括弧入れ」の機能を弱めているよ

うに思われる。しかし、美術館は場所へ開くと同時に、永遠にその場所や風景に溶け込み埋没しない、「異物」として存在し続けることでその空間を閉じてもいる。異物として場所から浮遊する美術館は、単調な日常生活を送る人々を一瞬にして日常の外へと引き離し、事物を芸術として捉え楽しむ「想像力」を与え、またもとの日常へ戻す。一度その経験を味わった人々は、広大な日常生活の領域、いわば開いた世界にふと現れる芸術をも発見するようになり、研ぎ澄まされた感覚で再び美術館へ足を運ぶ。

「閉じる」と「開く」、「つながる」と「隔絶する」という、相反する概念は美術館の両輪であり、人々の感覚を日常から非日常へ、そして再び日常へ、というように、俗の空間と聖の空間を行ったり来たりさせる。このようにして、美術館はその場所に生きる人々の感覚を更新し、より充実した日常を予感させるような空間であると、私は思っている。

送迎保育の現状と効果に関する一考察 — 埼玉県東南部の実施自治体を事例に —

木内 智子

送迎保育ステーションとは、駅前等の利便性の高い場所に設置した施設において、保育所の開所前・閉所後に児童を保育するとともに、複数の認可保育所へ児童を送迎することで、安心して子育てができる環境を整備する送迎保育事業の拠点である。

本論文では、都内への通勤者が多く保育需要が高いこと、また2012年現在埼玉県内で送迎保育を設置している8市のうち4市が近接していることから、埼玉県東南部の越谷市、草加市、八潮市、吉川市の4市を対象地域とした。4市の送迎保育事業については、各市の担当と送迎保育の実施者からの聞き取り調査により事業の内容と

現状を明らかにした。設置による効果については都内への通勤を想定した場合の時間的・空間的制約のシミュレーション及び送迎保育ステーションでの観察をもとに考察した。

シミュレーション分析の結果、送迎保育事業の設置当初は送迎保育の利用者として都内への通勤者が想定されていたが、埼玉県の子育て支援計画に沿って延長保育を実施する保育所が増え、開所時間が長くなってきたことで、対象地域では就労時間と保育時間のギャップは埋められる傾向にある。ゆえに、都内に通勤していても9時～17時の定時勤務であれば、送迎保育を利用せずに保

育所を利用できる可能性が高い。一方、頻繁・不定期の残業や、就労時間が不規則で退社時刻が遅くなる人においては現状でも保育所への送迎に関わる時間的・空間的制約は強いと考えられる。そのような人に対して、送迎保育は有効であると評価できる。

北越谷保育ステーションでの観察によると、利用者は少ないものの、越谷市の全保育所の閉所時刻を過ぎてか

らステーションに迎えに来る保護者が主であり、送迎保育を利用することで就労が可能となっている。一方で、保育時間が長くなることや帰宅時間が遅くなり生活が不規則になることで、子どもにとっては負担となる可能性も否定できない。就労と子育てを両立する上で、双方のバランスを常に考え保育サービスを利用あるいは提供する必要がある。(本誌, pp. 25-35に論文を掲載)

鹿児島県指宿市橋牟礼川遺跡・敷領遺跡における古墳時代、平安時代の葉化石を用いた植生復元

酒井 慈

本研究では鹿児島県指宿市に位置する橋牟礼川遺跡、敷領遺跡において開聞岳の古墳時代噴出物(青コラ)および平安時代噴出物(紫コラ)内に取り込まれた葉化石を用い、当遺跡周辺の古墳時代、平安時代の植生復元をおこなった。

葉や種実など植物の部分そのまま用いる大型植物遺体分析は、試料を生育地付近で得られる可能性が高く、また植物種を種レベルまで同定できるという特徴があるため試料の採取地付近の具体的な植生を詳細に復元できる。

当該地域では開聞岳の古墳時代噴出物、平安時代噴出物が厚く堆積しており当時の生活の様子が良好に保存されている。また開聞岳の火山灰層中には葉化石が取り込まれていることが報告されている。しかし当遺跡周辺の古墳時代、平安時代の植生については植物珪酸体分析、

花粉分析は行われてきたが火山灰層中の葉化石を含めた大型植物遺体分析はほとんど行われてこなかった。

本研究の結果、古墳時代の橋牟礼川遺跡において植物珪酸体を生成しない常緑広葉樹の樹種や蔓性植物、シダの存在を種や属レベルまで新たに指摘することができた。また同じく平安時代の橋牟礼川遺跡においては常緑広葉樹に加え、落葉広葉樹や陽地に生育する草本、シダ、蔓性植物などこれまで明らかになっていなかった人里や二次林を構成する植物が生育していたことがわかった。また敷領遺跡の2地点においては、試料採取地点で推定されている平安時代の土地利用に矛盾しない植物種を確認できた。

今後は葉化石の研究を蓄積し、より多地点で行うことで面的な植生の広がりや復元できると考えられる。

武道具産業における流通構造の現状と業界課題の考察

鈴木 安由子

武道具産業は、武道の発展に対して多大な貢献を果たしてきたにもかかわらず、その実態に対しては、ほとんどスポットが当てられることなく、既存の学術研究も少ない。そこで、本研究では、武道具の生産・流通・販売過程の現状を、武道具産業関係者へのアンケート調査およびインタビュー調査によって明らかにするとともに、武道具産業界内の流通構造の変化と今後の課題を、一般のスポーツ用品産業と比較しながら考察した。

武道具産業は、本来、職人の熟練した技術や長年の伝統と製法によって成り立つ産業であった。しかし、昭和40年代後半から、竹刀や剣道具などの生産が、製造費(人件費)の安い海外に移されることとなる。弓具業界においても、ほぼ同時期から化学素材等を使用した弓具が登場し、学生弓道の振興とともに道具価格の下落が進行した。これに伴い、国内の武道具製造業は、職人人口が減少するとともに、技術力の衰退に直面している。